

研究所探訪

語学研究所

所長 近藤 勝志



語学研究所(以下、語研という)は、教養部の英語・ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語担当の専任教員27名によって構成され、所員はそれぞれ上記外国語の語学教育及び言語・音声体系、文化・文学等について総合的に研究しています。

まず語学教育について触れてみます。国際語として重要な英語の教育における音声体系の教育について所員からつぎのような指摘がされています。音声言語によるコミュニケーションは、文字情報では表れない話者の態度、意図、感情等の情報を最も多く伝えているため、話し手が音声言語によって適切に話すことができないとミスコミュニケーションが起きる。(中略)このように、発音、アクセント及びイントネーションはコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしている。さらにイントネーションは各言語において特有のものであるため、日本語を母語とする英語学習者は英語のイントネーションの特徴を適切に捉えて発音する必要がある、とのことでした。

ここまで英語学習の音声面の研究について述べてきましたが、私たちが生きているグローバル化の進む世界では多言語と多文化、言い換えれば、多文化主義、視点の多様性の共存が不可欠です。多文化主義とか視点の多様性に諍うことなく対応するためには、多様な言語の学習と各言語圏の文化との交錯を把握することが必要になります。それを促進するためには各言語と文化についての最先端の研究の共有が必要になります。語研では春の講演会と秋の研究発表に学内外から講師を招き専門を異にする研究に触れることで各所員の研究領域の深化充実に努めています。因みに、平成28年度の講演会のテーマは「映画とアダプテーション」、研究発表のテーマは「北アイルランド問題と詩人たち：シェイマス・ヒーニーとマイケル・ロングリーを中心に」でした。いずれも大きなテーマを追うだけではなく、身近なテーマに目を向けることの大切さを痛感させる内容でした。

最後になりましたが、語研では機関誌として『語研紀要』を年1回発刊し、所員の研究成果を広く情報発信しています。

